

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 **3** 回 助成期間：平成 18年11月1日～平成 19年10月31日

テーマ： 自然を生かした豊かな体験活動

氏名： 山下 由紀 所属： 北九州市立河内小学校

1. 課題の主旨

本校は、のびのびフレンドリー制度(小規模校特別転入学制度)により、全児童の3分の2にあたる20名が校区外から通学している。また、本校は国定公園の中にあり、豊かな自然に恵まれている。校区外からの通学を希望する大きな理由の一つが、地域の実態や環境をいかした自然体験活動にある。

そこで、年間指導計画の中で、四季折々の地域の自然や人材を生かした豊かな体験活動を継続して実施するようにした。総合的な学習の時間及び生活科に位置づけた米づくり、野菜づくりを通して、収穫を喜ぶとともに自然のすばらしさ、人への感謝の気持ち、作物の育ちに感動する心などを育てたいと考え、実践した。そのまとめの一つとして、11月に「河内フェスティバル」を開催した。地域等について調べたことを模造紙にまとめ、掲示した。さらに、河内の食材や自分たちで収穫した米などを利用してメニューを決め、食べ物を調理し、保護者・地域の方に食べていただいた。低学年の児童は、どんぐりなどを活用してゲームコーナーを作った。また、1年間練習してきた太鼓の演奏も披露した。

この実践を通して、全校で仲良く取り組む姿や生き活きと笑顔で過ごす子どもたちの様子に地域の方や保護者の方々からは、満足のことばをいただいているところである。

2. 準備

- 米づくりー5月の箱苗づくり、田おこし、6月の田植え、水の管理等、9月の稲刈り、脱穀、精米、11月の弁当やおにぎりづくり、2月のもちつきなどを実施する。
- 野菜づくりー「河内菜園」に、年間を通して、きゅうり、トマト、ピーマン、さつまいも、春菊、大根等を植え、野菜の収穫までを学習する。
- 河内フェスティバルー体験活動の集大成として、地域・保護者を招いて発表会を開催する。

3. 指導方法

生活科、総合的な学習の時間として、学校のカリキュラムに位置づけ、全学年で取り組んだ。

- 米づくりについては、地域の稲作専門家の指導のもと、田植え、稲刈り、脱穀、精米を行った。
- 野菜づくりについては、土づくり、うねづくり、苗植え、水やり等、地域の方に指導していただきながら取り組んだ。
- 河内の食材を使った料理づくりでは、地域の方にゲストティーチャーとして授業に入ってもらい、メニューを考えさせた。

- 河内民芸村で指導を受け、中学年の児童が伝統工芸の製作を行った。
- 河内太鼓の演奏については、全職員で指導した。

4. 実践内容

18年度、19年度実践、または実施予定の内容

本校は、四季折々の自然の中で生活科・総合的な学習の時間を活用して、学年に応じて、虫や鳥、花の観察、川遊び、落ち葉・どんぐり拾い、雪遊びなど、のびのびと学習に取り組んでいる。

このような環境を生かして、特色ある教育活動として、米づくり、野菜づくりに年間を通して取り組んでいる。米は、「河内フェスティバル」で、弁当やおにぎりに利用する。残りは、学校単位で交流をしている藍島小学校と本校の児童の家庭にそれぞれ分配し、自分たちで作った米を試食してもらっている。

また、体験活動のまとめの一環として、地域・保護者を招いての発表会、「河内フェスティバル」を11月半ばに開催している。



「河内フェスティバル」では、18年度は、「河内弁当」を100食調理し、地域や保護者の方に食べていただき、大変好評であった。19年度は、おにぎり、おでんを120食調理し、喜ばれた。

そのほか、太鼓の演奏をし、1年間の練習の成果を披露した。



5. 成果・効果

豊かな自然環境のもと少人数での学びは、児童の心をやさしくするというのが実感である。四季折々の体験活動が子ども達の「学校が好き」という気持ちの一つになっている。小規模校転入学制度で在籍している児童にとって、朝早く家を出て5時近くのバスで下校するまで、学校でみんなと過ごすことが何ものにも代えがたく楽しい様子がよく分かる。

18年度の保護者アンケートにおいて、
 ・豊富な年間行事に感謝
 ・自然のなかで、のびのび活動している
 ・子どもたちの相互の関係が密接
 ・学校に行くのを楽しみにしている。……などの感想があった。

19年度も体験活動のたびに保護者の参観もあり、良い評価を得ている。

自然を生かしたさまざまな体験活動を全児童で取り組むことで児童の心の育ちが見られ、学校全体として落ち着いた状況である。

6. 所 感

この度の理科・環境教育助成によって得られた成果から、自然を生かした豊かな体験活動を、今後も年間学習計画に位置づけ、スムーズな実践を図っていききたい。それぞれの体験活動については、改善を加えながら、更なる活性化を目指すようにする。まとめの「河内フェスティバル」も、学年組織や社会の流れなどを考慮しながら進化させていきたい。例えば、食の観点だけではなく、環境の観点から河内地区の環境問題を考えるポスターセッションを開いたり、福祉の観点から年長者や障害のある人にやさしい河内地域づくりの研究発表をしたり等考えられる。

7. 今後の課題や発展性について

今後の課題は、様々な分野から自然を生かした体験活動を計画・実践していくことにより、特色ある教育活動を活性化していくことである。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

なし